

白山ふるさと文学賞

第七回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生5・6年小説の部 優秀賞

親友NO・1

明光小学校六年

山下 やました

果歩 かほ

ぼくには親友と呼べる友達がいる。それは強志だ。強志とは、小学校で六年間ずっと同じクラスで、一年生のころから仲が良い。二人ともゲームが大好きだったから、入学してすぐに友達になったのだ。以前のぼくは、友達がいっぱいいた方がいい、そう思っていた。だけど親友が一人いるだけで十分だと思いうようになった。

ある日、そんな強志とぼくの家でゲームをして遊んでいた。大好きなゲームだったのでいつもは一人でするけど、強志がどうしてもというので貸してあげた。今日は特別サービスだ。でも、ついにラスボスだ！という時に、強志がミスをした。ぼくはすごくイライラした。そして、そのイライラをおさえきれずにぼくは、「なんでミスするんだよ！」
そうさげんでしまった。これがぼくと強志の初めてのケンカだった。

——おれ、強志はわざとミスをした。悟のゲームだからってそんなの関係ない。だけど、これで良かったのだ。

この日から、ぼくと強志は口をきかなくなつた。ぼくも強志も意地を張つてあやまろうとしないからだ。ぼくからあやまる気はない。悪いのは、せっかく貸してあげたゲームでミスをする強志だ。あやまるもんか。だけど、休み時間も、登下校も、放課後も、ずーっと強志と一緒に過ごしてきたぼく。突然一人ぼっちになったぼくは、少しさみしい気持ちになった。強志とケンカしてから一週間がたった。ぼくは、あれから毎日一人ぼっち。そろそろあやまろうかな。そう思い、強志の所へ向かった。

「強志……」
そう声をかけた時だった。

「なあ強志、今度強志の家に遊びに行ってもいいか？」

「ああ、全然いいよ。」

二人はとても親しくしていた。強志に声をかけたのは、同じクラスの蒼だった。二人の会話がぼくの頭に流れる。目の前が真っ白になった。こんな会話聞いてられない。ぼくは走り出す。なんで強志が蒼と仲良くし

ているの？一番の友達はぼくだって言ってくれてたじゃないか！しかも仲良くしているのはクラス一頭が良くてスポーツもできる蒼だなんて。いろんな感情がいつきに頭にうかぶ。気がついたら、自分の部屋にいた。怒りと悲しみがぼくの心を埋めつくす。ふと、ゲーム機が目に入った。強志とやったゲームは楽しかったなあ。休み時間にした静かな図書館での読書。登校する時にしたくだらな話。放課後二人で協力してクリアしたゲーム。そんな、いつもは当たり前にしてきたガラクタのような時間が今では宝物のように感じる。あの時、ぼくがちゃんとあやまればよかった、そう思いながらぼくは眠りについた。

次の日の朝。いつも通り着がえ、いつも通り朝食をとる。一人での登校ももうなれた。学校に着き、自分のいすに座わる。今日は何して時間をつぶそうか。そう考えていた時だった。

「おう、悟、いっしょに遊ぼうぜ。」

そう言うてきたのはなんと蒼だった。その場に強志はいなかった。ぼくはとまどつた。だが、とてもうれしかった。強志以外のクラスメイトと遊ぶ事が初めてだったからだ。ぼくは、

「うん！」

と返事をし、蒼達と休み時間を共に過ごした。

次の日も蒼達と休み時間に遊んだ。その時、蒼が言った。

「なあ、強志つてさ、なんかムカつくんだけど。強志のこと、イジメようぜ。」

ぼくはとてもおどろいた。頭も良くて、スポーツもできるあの蒼がイジメをするなんてとても思えなかったからだ。でも、もしさからつたらぼくがイジメられるにちがいない。この時のぼくは、自分の事だけを考えて、蒼のささいにのつてしまった。

次の日から強志へのイジメが始まった。最初はすれちがう時にわざとぶつかつたり、筆箱をかくしたりするなどの軽いイタズラだった。でも、だんだんクラス全員が強志の事を無視し始めた。ぼくは胸が痛んだ。ケンカはしたけれど、五年以上の間ずっと親友だった強志。ぼくは、どんなイジメにもじつとたえる強志を見てとても苦しくなつた。

「イジメ」受けてみると案外つらいんだな。まあ、おれはこんなイジメになんか負けないけど。もうちよつとの辛抱なんだから。

夜、ぼくは強志を助けようか心がゆれた。自由帳を取り出し、新しい真っ白なページに鉛筆を走らせる。

1. 助ける

◎また強志と仲良くなれる

×ぼくもイジメられるようになる

2. 助けない

◎今のまま蒼達と楽しく過ごせる

×強志へのイジメが続く

強志を助けるとぼくもイジメられるかもしれない。でも、五年以上の間、ぼくに笑顔をくれた強志を助きたい…!

「よしっ！」

ぼくは決心した。必ず強志を助けてみせる。絶対後悔なんてしないんだと。——悟と過ごすのも明日で最後か…。おれは少しさみしい気持ちになった。

「作戦成功だ。」

そうつぶやいた。

翌日、ぼくは蒼の所へ行った。

「ムカつくからって、人をイジメるのは絶対まちがっている！」

ぼくは蒼に胸を張って言った。

ぼくはその後すぐに強志のもとへ走った。早く強志と仲直りしたい、そう思ったからだ。

「強志！」

強志は少しおどろいた顔をした。

「悟、どうして…。」

「あの時はごめん。ゲームでミスしただけなのにあんなに大きな声できんじやって。それに、みんなと一緒に無視したり…。本当にごめん。」

なみだが勝手にあふれてくる。だけど、強志の口から出た言葉はトゲのようだった。

「おれはもう、お前の親友でも友達でもない。」

ぼくは突然の出来事に心が折れた。

あれから一ヶ月がたった。強志は、あの次の日、県外の小学校に転校した。ぼくはあれからクラスの友達と仲良くなることができた。ゲームもふういんした。

「強志、何してるかな…。」

そうつぶやいた。その時、友達が言った。

「強志って、悟に友達をつくってもらったために悟とケンカして、自分をいじめようとしたのなんだよ。」

ぼくはとてもビックリした。ぼくのために？どうして？

ぼくは急いで家に帰った。自分の部屋にかけこみ、レターセットを開く。

強志へ

あれから友達たくさんできたよ。

だけど、ぼくの親友No.1はぶっちぎりで強志だ！

あのゲームの続きまた一緒にやろうぜ！！

悟より